

若い映画制作者のフォト・ギャラリー

ミランダ・ジュライ



©AP Images/Francois Mori

ミランダ・ジュライは1974年生まれ。本人の公式サイト [mirandajuly.com/about] によると、〈ミランダ・ジュライ [ジュライは本名ではない] は映画製作者、パフォーマンス・アーティスト、作家。カリフォルニア州バークレーに育ち、この地で初めての脚本を書き、みずから演出して地元のパンク [ロック] クラブで上演して、キャリアの第一歩を踏み出した。ジュライのビデオ、パフォーマンス、インターネットを使ったプロジェクトは、近代美術館 (MOMA) やグッゲンハイム美術館、そして2002年のホイットニー美術館ビエンナーレで紹介された [3館ともニューヨークにある]。パリス・レビュー誌やハーパーズ・マガジン、ニューヨーカーに短編小説を発表し、2007年5月にはスクリブナー社から短編集が出版される。ジュライはアーティストのハレル・フレッチャーと一般参加型ウェブサイト [learningtoloveyoumore](http://learningtoloveyoumore.com) を作り、2007年秋にはプレステルよりコンパニオン・ブック (手引書) が発売される予定。脚本・監督・主演を手がけた初の長編映画「君とボクの虹色の世界 (Me and You and Everyone We know)」はサンダンス映画祭で審査員特別賞、カンヌ映画祭でカメラドール (新人監督賞) を含む4つの賞を受賞。最近、新しいパフォーマンスを初演。現在は2作目の映画に取りかかっている。ロサンゼルス在住)

イサベル・コイシェ



©AP Images/Daniel Ochoa de Olza

1960年スペイン生まれの監督・脚本家・プロデューサーで、時には女優として出演することもある。大学で歴史を勉強した後、広告業界に就職。結局、映画製作への愛着と広告の制作面での経験が結びつき、映画制作会社を設立。スペイン、カナダ、フランス、米国の会社とともに数カ国語で映画をつくった。最初の英語の映画は1996年の「あなたに言えなかったこと」で、出演者は米国人。コイシェはスペインのゴヤ賞に2回ノミネートされており、彼女の作品はサンダンス映画祭を含む多数の映画祭で上映されている。

アニー・サンドバーグ



©AP Images/Michel Spingler

テレビのリアリティー番組、ドキュメンタリー、短編映画、ドラマ、独立系映画などの分野で活動する脚本家・監督・プロデューサー・シネマトグラファーのサンドバーグは、何本もの受賞作品を製作してきた。無実の罪で長い間投獄されたアフリカ系米国人の男の実話に基づく2006年の「The Trials of Daryl Hunt」はインディペンデント・スピリット賞とサンダンス審査員大賞にノミネートされた。2007年の「The Devils Came on Horseback」はダルフルの殺戮をテーマにしたドキュメンタリーだ。

エンターテインメント業界とメディアで働くダートマス大学卒業生を紹介するウェブサイト (alum.dartmouthentertainment.org/newsanddocs.html) には、サンドバーグの経歴が次のように紹介されている。(以下同サイトからの引用)

〈アマチュアボクシングの世界とサウスブロンクスでトレーニングを積む若者たちの生活を描いた長編ドキュメンタリー「In My Corner」を共同製作。この作品は、PBS（公共放送サービス）の [エミー賞] 受賞番組「P.O.V（ポイント・オブ・ビュー）」シリーズの1本として全米に初公開された（1999年）。手がけたテレビ番組には、A&E局（アーツ・アンド・エンターテインメント・ネットワーク）の葬儀屋一家を主人公にしたドキュメンタリーシリーズ「Family Plots」などがある。またプロデューサー兼ディレクターとして、ニューヨーク・タイムズ・テレビジョンのシリーズ「Now Who's Boss」の立ち上げに協力。プロデューサーとして、1996年にアカデミー賞とエミー賞を受賞したHBO（ホームボックス・オフィス）と米国ホロコースト記念ミュージアムが共同製作した「One Survivor Remembers」や、10回からなるPBSの「History of American Cinema Project」（1995）にかかわった。ミラマックス社の脚本下読み係として映画界で働きだして以来、フリーランスの脚本家・プロデューサーとして幅広く活動。全米アウトドア指導者養成学校のケニアにおける学期を終了後、世界食糧計画プロジェクトに参加してナイロビで英語を教えた。ダートマス大学の卒業生で、同校では英文学の学士号を取得した〉

サラ・ポーリー



©AP Images/Markus Schreiber

カナダ出身。子役として映画やテレビのキャリアをスタート。その後、主に独立系作品で悲劇の渦中にあるヒロインなどを演じるようになる。イサベル・コイシェ監督の「あなたに言えなかったこと」「あなたになら言える秘密のこと」に出演。最近ではカナダのテレビ番組を中心にディレクター・監督業にも進出している。29歳（1979年1月8日生まれ）のポーリーは政治活動にも熱心であることで知られ、演じた役と同じくらいの数の役を蹴ったといわれる。トロントに住むポーリーは、カナダや米国各地の映画祭の演技部門でノミネートされている。

米国で2007年5月に公開された監督作品「アウェイ・フロム・ハー君を想う」は、アルツハイマー病のパートナーをもつ2組のカップルのラブストーリーを繊細に描いたとして高く評価される。ポーリーの前途有望なキャリアに新たな業績が加えられた。

アルフォンソ・キュアロン



©AP Images/Diane Bondareff

1961年、メキシコ生まれ。メキシコで映画を勉強し、同国で撮影された英語による映画の製作にかかわるようになる。児童文学のクラシック「リトル・プリンセス」、チャールズ・ディケンズの「大いなる遺産」、J・K・ローリングの「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」など、長年にわたって文学を原作にした作品を手がけている。2007年には、製作を務めた「パンズ・ラビリンス」、共同脚本・監督の「トゥモロー・ワールド」（これも小説の映画化）の2本が広く称賛された。「パンズ・ラビリンス」はアカデミー賞やBAFTA（英国映画テレビ芸術アカデミー）賞の数部門など、さまざまな映画賞の候補となり、多くの賞に輝いた。「トゥモロー・ワールド」もキューアロンに脚本賞や監督賞をもたらしている。「パンズ・ラビリンス」は本人が設立した製作会社エスペラント・フィルムズの商品だ。キューアロンはしばしば、友人で同郷の監督たち、ギジェルモ・デル・トロとアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥとともに、現代の世界の映画にメキシコ人が貢献していることを世界の観客に知らしめたとしてたたえられている。現段階ではまだ映画会社の確認は取れないものの、キューアロンがハリー・ポッターの世界に戻ってきて、シリーズ最終話を監督するといううわさもある[最終巻は他の監督に決まった。]。伝えられるところでは、キューアロンは、最初に手がけたハリー・ポッター映画で至福の2年間を過ごしたので、もう一度そんな体験ができればうれしいと述べたといわれる。「ハリー・ポッター」シリーズ最終巻「Harry Potter and the Deathly Haloows」（邦題「ハリー・ポッターと死の秘宝」）は今年 [=2007年。邦訳は2008年] 出版された。

ノア・ボームバック



©AP Images/Jim Cooper

1969年生まれ。脚本や監督を務めるほか、多くの作品に俳優として出演している。監督デビュー作は、大学をいやいやながら卒業する学生たちを描いた「Kicking and Screaming」。1996年のニューヨーク映画祭でプレミア上映され、初めてメガホンを取った作品でありながら多くの賛辞が寄せられた。90年代後半に数本の映画を撮ったが、2005年の「イカとクジラ」までは映画製作よりも脚本家としての活動が目立った。

ローラ・リニーとジェフ・ダニエルズが主演する「イカとクジラ」は自伝的な作品で、インディペンデント・スピリット賞やアカデミー賞にノミネートされた。2007年公開の「マーゴット・ウェディング」にはニコール・キッドマン、ジェニファー・ジェyson・リー、ジャック・ブラック、ジョン・タトゥーロが出演。ウェス・アンダーソン監督との2本目の共作であるストップモーション・アニメ映画「The Fantastic Mr. Fox」を製作準備中。前作は2004年に公開されたビル・マーレイとオーウェン・ウィルソン主演の「ライフ・アクアティック」。作家と評論家の両親をもつボームバックはニューヨークで育った。

ガブリエレ・ムッチーノ



©AP Images/Matt Sayles

1967年生まれ。ローマの映画学校で学び、母国イタリアで映画製作者として成功する。ムッチーノの作品「L'ultimo bacio」は2002年のサンダンス映画祭で受賞（2006年に「ラストキス」としてリメイクされる）。おそらくはこの受賞がひとつのきっかけとなって米国人に才能を注目されたムッチーノは、映画製作の新たな段階へ入った。主演のウィル・スミスがオスカー候補になった2006年の「幸せのちから」など、英語による映画製作でも評判をとった。現在はテレビ番組のシリーズを手がけている。また映画では、米国への移民の愛の物語を描くという「Man and Wife」と、ジム・キャリーとキャメロン・ディアスの出演が予定されている「A Little Game」を製作準備中。（「A Little Game」はキャリーもディアスも降板、監督もアン・リーになった。）

タイラー・ペリー



©Erin Patrice O'Brien

1969年ルイジアナ州ニューオーリンズ生まれ。子供時代に貧困や虐待、耐えがたいほどの困難を経験する。1990年、テレビの「オブラ・ウィンフリー・ショー」を見たとき、ウィンフリーが視聴者に向かって辛い経験はそれを書くことによって乗り越えろとアドバイスするのを聞く。ペリーのその試みは結局、最初の戯曲になった。賞に輝く脚本家、作家、俳優、プロデューサー、監督であるペリーは、ジレンマをかかえたアフリカ系米国人の日常生活をテーマにした舞台や映画で知られている。彼の舞台を初めて映画化した作品で3役を演じ、その後の映画にも続けて出演している。

ペリーの作品は、都市で上演されていたアフリカ系米国人による演劇の伝統にのっとった教訓劇の特徴を持つ。主役はたいてい、知恵と良心を駆使してユーモラスに他のキャラクターたちを引っ張っていく傑出したヒロインだ。ペリーは自分の母親と叔母から影響を受けてこの女性主人公を生み出し、「マディア」という愛称を与えた。彼はヒロインのコミュニティーの文化とアフリカ系米国人を中心とした視聴者の文化に絶妙に波長を合わせて、ユーモアをもってマディア役を演じている。

マディアはペリーが書いた最初の本「Don't Make a Black Woman Take Off Her Earrings: Madea's Uninhibited Commentaries on Love and Life」の主人公でもある。2006年に出版された同書は数週間にわたってニューヨーク・タイムズ紙のノンフィクション部門のベストセラーリスト1位になり、同年の権威あるクィル賞のユーモアブック部門と年間最優秀書籍部門に選ばれた。ペリーはつねに製作段階の芝居、公開中の映画、放送中のテレビ番組を抱えている。ペリーの公式サイト [www.tylerperry.com] によると、2つのテレビシリーズ「House of Payne」と「Meet the Browns」が進行中で、2007年と2008年にケーブルテレビ局で放送開始の予定。映画は2007年2月に「Daddy's Little Girls」が公開された。

ウィル・スミス



©AP Images/Franka Bruns

ペンシルベニア州フィラデルフィアで過ごした少年時代、ウィル・スミスは友達を引きつける魅力があったため「ザ・プリンス」というニックネームをつけられた。公式サイト [<http://www.willsmith.net>] によると、ラップを始めたのは12歳からという。16歳までに「ザ・フレッシュ・プリンス」という名前でラップ歌手として有名になり、友人の「ジャジー・ジェフ」とよく舞台に上がるようになった。

同時に、俳優としても注目を集めはじめた。22歳のときにカリフォルニアに移住し、テレビのコメディドラマ「The Fresh Prince of Belair」（ベルエアはカリフォルニア州ロサンゼルス近郊の裕福な地区）に主演。6年後のシリーズ終了時にはすでに映画界にも進出を果たしていた。現在、スミスはハリウッド屈指の成功した俳優であり、ボクサーのモハメド・アリの人生を追った「ALI アリ」、「メン・イン・ブラック」「ヒッチ」「バッド・ボーイズ」、2006年の「幸せのちから」などドラマからコメディまで幅広い作品で実力を発揮している。「幸せのちから」ではアカデミー賞候補となり、NACCP（全米黒人地位向上委員会）のイメージ賞をはじめ数々の賞に輝いた。またこの映画の成功がとりわけ喜ばしいものだったのは、スミスがビジネスパートナーとともに設立した映画・テレビ番組制作会社オーバールック・エンターテインメントの制作した作品だったからだ。同社は何本ものヒット作を世に送り出している。「幸せのちから」では当時8歳（1998年7月8日生まれ）の息子ジェイデン（写真右）と共演している。

2007年4月、ニューズウィーク誌は、俳優、ミュージシャン、プロデューサー、夫、父親をこなす38歳（1968年9月25日生まれ）のウィル・スミスを、これまで世界で44億ドルの興行収入を稼ぎだしたとされる実績などをあげて、「世界で最もパワフルな俳優」と称えた。この記事のためにニューズウィークのインタビューを受けたある映画会社のトップは、スミスの人気を、「……まず神のようなウィル・スミスがいて、それから人間たちがいるようなもの」と表現したという。

ルーシー・リュウ



©AP Images/John Smock

台湾移民の両親のもとにニューヨークで生まれる。5歳になるまで英語を習わなかった。高校卒業後にミシガン大学でアジアの言語と文化の学位を取得。大学生生活の終わりに舞台「不思議の国のアリス」の役を手に入れ、俳優としてのキャリアをスタートさせた。現在38歳（1968年12月2日生まれ）になるリュウのこれまでの活動は多彩で、数本のアニメーションの声の吹き替えやテレビドラマ「アリー my ラブ」のレギュラーを務め、「キル・ビル」「チャーリーズ・エンジェルズ」とそれらの続編などの映画に出演した。ドキュメンタリーを含む映画の製作も始め、自らプロデュースした作品のうちの1本「ルーシー・リュウの『3本の針』」ではエイズウイルスに感染した中国の女性を演じている。

多才なリュウはアーティストとして個展を3回開催。マーシャルアーツに通じ、楽器を演奏し（アコーディオン）、スキーやロッククライミングもこなす。中国語は堪能で、日本語、イタリア語、スペイン語も少し話す。ユニセフの米国基金大使としてパキスタンやレソトを訪問。メディアに注目されたアジア系米国人としてアジア人優秀賞を受賞している。

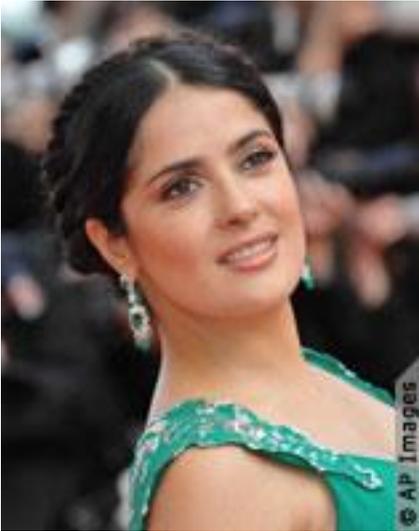
ソフィア・コッポラ



©AP Images/Dima Gavrysh

有名な映画製作者フランシス・フォード・ Coppola を父親に 1971 年に生まれる。タイミングよく父親の「ゴッドファーザー」で洗礼を受ける赤ん坊役でスクリーンデビュー。1990 年の「ゴッドファーザーPARTⅢ」ではメアリー・コルレオーネを演じた。Coppola は子役からスタートし（ドミノ・Coppola という名前で出演していることが多い）、少女時代から大人になるまで続けた。しかし 90 年代には父親と同じようにプロデューサーと監督の道を歩きはじめる。2004 年の「ロスト・イン・トランスレーション」はアカデミー賞の最優秀監督賞にノミネートされる。女性監督がこの部門で候補になるのは 3 人目で、米国人女性としては第一号だ。2006 年の「マリー・アントワネット」は、Coppola が愛するコンテンポラリーミュージックを使い、物語を現代風にアレンジしたもの。同作品はカンヌ映画祭の最高賞であるパルム・ドール賞など多くの賞の候補になった。カンヌではフランス全国教育制度映画賞（the Cinema Prize of French National Educational System）を受賞。アカデミー賞では衣装デザイン賞を獲得した。

サルマ・ハエック



©AP Images/Seth Wenig

1966年、メキシコ生まれ。才能、美貌、知性を武器にメキシコや米国など各国で女優、プロデューサー、監督として活動し、華々しい成功を収めている。メキシコでテレビと映画のスターになった後に米国に進出。当時、米国映画で中南米系の女優の役柄がかぎられていることを思い知らされる。レバノン人の血を引くハエックは忍耐力を発揮し、才能を磨き、社会活動に手を染めながら、より大きくて幅広い役を獲得しはじめる。同時に、おそらく自分や他の女優たちのために良い役を確保したいと思い、プロデューサー分野に進む。最初に製作した長編映画「大佐に手紙は来ない」（1999年）はカンヌ映画祭で上映され、メキシコ作品としてアカデミー賞外国語映画賞にエントリーされる。

ハエックは、自分で製作した「フリーダ」で伝説的なメキシコ人画家フリーダ・カーロを演じて高く評価された。この作品はアカデミー賞6部門の候補となった。他の出演作品には「愛さずにはいられない」「In the Time of the Butterflies」「ワイルド・ワイルド・ウエスト」「デスペラード」「フロム・ダスク・ティル・ドーン」「レジェンド・オブ・メキシコ/デスペラード」など。

また、コロンビアのテレビドラマ「ベティ〜愛と裏切りの秘書室」を米国向けにリメイクして、テレビ界に大きな影響を与えた。ハエックも準レギュラーとして登場する米国版「アグリー・ベディ」はイメージ賞、ゴールデングローブ賞、ピーボディ賞を受賞。マイノリティのキャラクターの認知度を高め、視聴者、とりわけ若い女性たちに、外見の美しさが何よりも重要で価値ある特徴というわけではないことを教えるドラマとして称賛されている。

ミニー・ドライバー



©AP Images/Markus Shreiber

1970年、ロンドン生まれ。子供時代の一時期をバルバドスで過ごす。イギリスで教育を受け、ウェバー・ダグラス演劇芸術学院に学ぶ。キャリアは音楽活動からスタートしたが、その後しばらくは俳優業を優先し、現在は両方をこなす。音楽分野では歌手とソングライターとして活躍している。出演作品は「サークル・オブ・フレンズ」「この胸のときめき」「ポイント・ブランク」「オペラ座の怪人」、アカデミー最優秀助演女優賞候補になった「グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち」など。テレビドラマ「ウィル&グレイス」の準レギュラーを務め、2007年からケーブルテレビ局FXのドラマ「The Riches」に出演している。2007年公開の「ザ・シンプソンズ MOVIE」を含む数本のアニメで声の吹き替えをしている。1998年の「At Sachem Farm」（公開は2001年）でプロデュースを手がけ、同じく製作に加わった2008年の「Ripple Effect」ではフォレスト・ウィテカー、バージニア・マドセンと共演している。

ベン・アフレックとマット・デイモン そして プロジェクト・グリーンライト



©AP Images/Chris Pizzello

プロジェクト・グリーンライトの公式ウェブサイト

[<http://www.projectgreenlight.liveplanet.com>] を見れば、これがハリウッドのシンデレラストーリーだとわかる。子供時代からの友達2人が俳優になろうとあがいている。何年もの苦勞の末、彼らは自分たちで脚本を書き（「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」）、主演して認められ、有名になり、アカデミー最優秀脚本賞を手にする。これがマット・デイモンとベン・アフレックの真実の物語だ。この成功がきっかけとなって、彼らは「アメリカン・パイ」のプロデューサーであるクリス・ムーア、およびミラマックス・フィルム・アンド・テレビジョンと組んで、脚本家として大きく飛躍するチャンスを探している者と映画業界の架け橋になるための脚本コンテストや仲間づくりをスタートさせることにした。

第1回プロジェクト・グリーンライト脚本コンテスト（PGL1）は2000年秋に開催され、7000を超えるオリジナル脚本の応募があった。応募作品はまず250に、さらに30に絞られ、最終候補に残って興奮冷めやらぬ10人が自分の脚本の1シーンを製作する撮影に取りかかった。そして上位3人の面接が行われ、ピート・ジョーンズに優勝脚本「夏休みのレモネード」を映画化するための製作費100万ドルが与えられた。

数カ月後に、エイダン・クイン、ボニー・ハント主演で完成したジョーンズの映画は、サンダンス映画祭でプレミア上映された。ジョーンズは全米各地を巡るプロモーションツアーを行い、自分の映画について語った。ケーブルテレビ局のHBOはエミー賞に3回ノミネートされた同局のシリーズの一環として、脚本から映画化までを描いたドキュメンタリーを製作して放送。アフレックとデイモンの目標は達成された。PGL1についてクリス・ムーアは、「人々はこの番組で、映画をつくることはどんなに大変で、最初の1本を撮るのがどんなに重圧のかかることか、そして最後に金を払った観客に初めて自分の映画を披露するとき、どんなに報われた気分になれるかがわかってくれただろう」と言う。2003年のPGL2、2005年のPGL3は、対象作品のジャンルを広げ、プロフェッショナルになるチャンスをさらに2つのカテゴリーの映画製作者に与えることになった。

俳優としてのキャリアでは、アフレック（写真左）とデイモンは、才能がまだ認められずに最初の脚本を書くことを夢見ていたルームメイトであった時代から、大出世を遂げた。デイモ

ンは CIA の秘密捜査官を描いた小説を映画化したシリーズ 3 本で、主役のジェイソン・ボーンを演じた。また「オーシャンズ 11」と続編 2 本、最優秀主演男優賞にノミネートされた「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」に出演し、最近のヒット映画「グッド・シェパード」「ディパーテッド」でも高く評価されている。アフレックも多忙だ。2006 年と 2007 年に公開された主演映画は「ハリウッドランド」「スモーキング・エース／暗殺者がいっぱい」など 4 本。2007 年には脚本と製作も兼ねた「Gone, Baby, Gone」で監督デビューした。

ドリュー・バリモア



©AP Images/Stephen Chernin

8 歳のときにスティーブン・スピルバーグの 1982 年の大ヒット作品「E.T.」で主人公の少年の妹ガーティを演じて一躍世界的スターになった。しかし、これは初めての役ではない。生後 11 カ月で、すでにテレビコマーシャルに出演している。ハリウッドの伝説的な俳優一家に生まれた彼女の成功は、父親がジョン・ドリュー・バリモア、祖父がライオネル・バリモア、祖父のきょうだいエセル・バリモア、ジョン・バリモア、という伝統を受け継ぐもの。十代の若いころは、薬物乱用という問題を抱えていた上、自身が選ぶ役柄のタイプもあって、「バッドガール」のイメージがあった。だが、1996 年になってキャリアを立て直し、「ウェディング・シンガー」「25 年目のキス」「50 回目のファーストキス」となど一連のロマンチックコメディに出演。これらの作品では完全に方向転換して、内気で傷つきやすい女性を演じた。また 2001 年の「サンキュー、ボーイズ」では十代で出産して離婚を経験する女性を演じるなど、よりドラマ性のある役柄に挑戦しはじめた。その一方で、製作会社を設立して大成功させ、「チャリーズ・エンジェル」や、シンデレラ物語を現代風に解釈した「エバー・アフター」などを生み出した。最近では「ラブソングができるまで」（2007）ではヒュー・グラントと共演している。

バリモアはイギリスのファッションデザイナー、ジャイルズ・ディーコンのコレクションの広告に起用された。2007 年 3 月のイギリス版ヴォーグ誌に掲載されたインタビューで、ディ

ーコンは彼女を選んだ理由をこう説明している。「彼女はとても知的で、素晴らしいビジネスウーマンで、他人の手本になる。だが、過去には過ちを犯し、それを乗り越えた人でもある。人々はそのことに反応し、敬意をいだくと思う」

またバリモアは、ドキュメンタリー作品への関心を深め、批評家の注目を集めたいいくつかのプロジェクトを指揮している。プロジェクトのひとつは、彼女の1年以上にわたるアフリカの子供たちへの食糧支援プログラムの活動とその映画製作に関するもの。バリモアは次第に飢餓に苦しむ子供の問題にかかわり、この問題と取り組む機関や団体の活動に加わるようになった。国連世界食糧計画（WFP）はバリモアのこの分野での業績を認め、2007年5月、飢餓撲滅の親善大使に任命。有名人であることを有効に利用して学校給食プロジェクトの必要性を訴えるよう求めた。バリモアは最初の任務の一つとして、米連邦議会議事堂で上院議員たちと会い、給食制度の大切さを訴えた。

バドウル・ビン・ヒルスィー



写真提供 Bader Ben Hirsi and Arab Film Distribution
©AP Images/Felix Films

ロンドン育ち。彼の家族は60年代に起こったイエメン革命の際イギリスに亡命した。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジでドラマ製作の文学修士号を取得。1995年にイエメンを訪れ、叙情的なドキュメンタリーとの呼び声高い「**The English Sheikh and the Yemeni Gentleman**」を撮る。この映画は、イエメンに長年暮らすイギリス人が、ビン・ヒルスィーに母国を案内する過程を追っている。

2001年9・11同時多発テロ以後、アラブ人映画製作者によるドキュメンタリーが強く求められていた。ビン・ヒルスィーが手がけた作品に、2003年のドキュメンタリー「**Yemen and the War on Terror**」や2002年の「**9/11 Through Saudi Eyes**」がある。後者は、ハイジャック犯の家族や友人、アラブのメディアのトップ、政治や軍事を専門とするアナリスト、心理学者などにインタビューし、9・11テロの結果起こったさまざまな出来事や問題に対する見解を語らせたものだ。このビデオ作品は、サウジアラビア側の視点から9・11テロを詳細に眺

めた初のドキュメンタリー。ケンブリッジ大学教育コアカリキュラム・ビデオコレクションの社会研究セクションに収められ、「政治科学、中東、イスラム圏について勉強する学生にとっても役立つ教材になる」と説明されている。

その後、ビン・ヒルスイーは一般の長編映画に方向転換した。「古きサナアの新しい日」は2005年カイロ国際映画祭で最優秀アラブ作品賞を受けた。この映画はニューヨークのアルワン映画祭（現在はニューヨーク・アラブ&南アジア映画祭という）で上映された。ビン・ヒルスイーはこの映画の初期の製作段階ではイエメン政府から許可と資金を受けたが、同国の文化大臣はイエメンでの商業的公開を認めなかった。しかしサナアで開かれた映画祭でイギリス作品として上映されている。

ビン・ヒルスイーは中東地域で映画を製作するという自分の経験が、他のアラブ人映画製作者、とりわけ映画の伝統がほとんどない保守的な湾岸諸国にいる製作者を勇気づけられればと願っている。彼はこれまで、ヨーロッパや北米で映画を勉強して母国に戻り、苦労しながら映画を撮っている若手監督たちと会ってきた。「アラブ映画の新しい動きがある」と、ビン・ヒルスイーはイギリス拠点の映画専門サイト「ネトリビューション」のインタビューで語っている。「新しくて胸が躍るようなスタイルだ。世の中は変わりつつある」